

西鶴作品の教材化にみる古典学習指導上の課題

——「世界の借屋大将」の例を中心に——

大久保 順 子

今日の高等学校用国語教科書の古典教材、特に古文においては、物語や日記や和歌などの王朝文学を中心とした中古文学作品、あるいは軍記や説話を含めた中世文学作品を扱うものが多く、教材としての近世（江戸時代）作品の現状の位置は、「古典教材として脇役でしかない」ともいわれる。だが、近世作品の一部は、従来から継続的に採用されてきている。例えば平成十五年（二〇〇三）度入学生から実施された教育指導要領による必修科目の「国語総合」の各社教科書の多くに、松尾芭蕉の俳文『奥の細道』の部分が採られている。また、平成十二年度用国語教科書一覽を参照すると、「古典」と扱われる近世作品としては他に、俳諧の発句では芭蕉の「旅に病んで」¹「海暮れて」、蕪村の「白梅に」²「花いばら」、一茶の「めでたさも」³「涼風の」⁴などがあり、散文では宣長『玉の小櫛』の「もののははれ」論、秋成『雨月物語』「浅茅が宿」などが教材とされる例が多い。

近松の『曾根崎心中』などの浄瑠璃、そして本稿で検討する西鶴の浮世草子作品の教材数は、現状では芭蕉や秋成に次ぐ量に留まっている。雅文体の古典的格調につながる俳文や読本の文章と比べ、浄瑠璃や浮世草子には当時の庶民の日常生活に関する語彙や会話文が多く用いられており、その読解には江戸時代の独特な風俗事象の理解を

要する。古典文法の基礎と有職故実的な伝統文化の常識を、王朝的作品を中心に学ぶ高等学校の古典授業の中では、江戸時代風の文体の読解は大学受験対策にはさほど役立たない、といった扱いをされているのかもしれない。一方で、「古文」学習用に採用される『奥の細道』などこそ、内容の点でいえば数多くの和漢の「先行文学からの引用の文学であり」、高中生にはその文脈が「難解すぎるのではないか」とする堀切実氏の指摘³もある。「国語総合」教科書での『奥の細道』普及状況は、近世文芸を代表して「古典」化され権威化した「蕉風の威徳」の影響であろうか。このような近世作品の採用の状況を鑑みつつ、「西鶴」の作品が教材としてどのように扱われているのか、また、そこから提起される古文授業指導上の諸問題について、実際の教科書の記述やテキストの扱い方、「学習の手引き」等の例を参照し、考察したい。

一 平成十九年度現在の西鶴作品の採用状況

平成十五年度版各社国語教科書における西鶴作品の採録状況を一覧した前掲堀切氏の指摘を参考としつつ、平成十九年現在までの採用状況を確認する。平成十九年度の古文教材のほぼ大部分が、平成十五年度の教育指導要領開始時の検定済の再版である。これらの中で採用されている西鶴の浮世草子の代表的な作品は、次の二つである。

『日本永代蔵』巻二の一 「世界の借屋大将」

貞享頃の当時の京都の有名な商人・藤屋市兵衛の商売と家内の儉約の智恵を中心に描く、西鶴浮世草子でも代表的な作品の一話（平成十二年度用国語教科書一覽では十二社十三種の教科書が採用）。平成十五年度以前の版の例では、筑摩書房『古典 改訂版⁴』や、明治書院『精選新国語 古典編⁵』などがある。後者の単元内容については明治書院『精選 新国語 発問例集』（平7・3）も参照できる。

現在、桐原書店『高等学校 古典（古典編）』などが本話を採用。桐原書店は従来、『高等学校 古典（古文編）』が採用しており、同社の先行教科書の旧版から改訂版へ継続的に同教材が採用されるこのような例は、各社教科書に多く見受けられる。他、平成十九年版の右文書院、教育出版、東京書籍の教科書の同話の採用例

の詳細については、後述する。

『西鶴諸国ばなし』 卷一の三「大晦日はあはぬ算用」

江戸の貧しい浪人・原田内助の大晦日の宴と小判の紛失をめぐる一話であり、太宰治『新釈諸国噺』「貧の意地」の典拠としても知られている（平成十二年度用一覽では七社十一種が採用）。三省堂はかつての平成六年度検定版『国語』が採用し、『三省堂版準拠/国語 課題ノート 古典編』（三省堂教材システム、平7）には、この「大晦日はあはぬ算用」学習用の練習問題集もあり、参照できる。現在は三省堂『高等学校 古典「古文編」』の他に、筑摩書房『古典』、第一学習社『高等学校 古典 古文編』、大修館書店の『古典1』及び『精選古典』も採用している。

なお、前掲の平成十二年度用国語教科書教材一覽によると、西鶴作品ではこれ以外に

『西鶴諸国ばなし』 卷一の「公事は破らずに勝つ」（大修館書店『高等学校 新国語 改訂版』）

同巻四の二「忍び扇の長歌」（筑摩書房『古典 改訂版』）

『好色五人女』 巻四「恋草からけし八百屋物語」（角川書店『高等学校 新国語』）

『日本永代蔵』 卷一の三「波風静かに神通丸」（日栄社『高等学校 古典』）

『世間胸算用』 卷二の四「門柱も皆かりの世」（尚学図書『新版 古典』）や旺文社『古典（総合）』

同巻一の四「鼠の文づかひ」（大修館書店『高等学校 国語 改訂版』、平成十五年検定後の明治書院『精選古典』）

同巻三の三「小判は寝姿の夢」（東京書籍『古典』）

同巻四の二「奈良の庭籠」（蛸売りの八助）（明治書院『総合古典』）

同巻五の三「平太郎殿」（尚学図書『新選古典』）

等が教材化されている。

二 教材としての「世界の借屋大将」

これまでの国語教科書においても、西鶴作品の中で比較的有名なものが幾つか採用されており、高校二〜三年頃の単元などで、それまで西鶴作品を知らなかった生徒が「古典」の時間の教材として「初めて作品に接する」可能性がある、という状況は認められる。しかし、平成十五年度検定以前と以降の教科書とは、同じ作品を扱った教材であっても、本文の扱い方や、「学習の手引き」等の設問が示す指導の方向性などに、様々な変化が起こっている。まず、『日本永代蔵』巻二の一「世界の借屋大将」の教材例をもとに、諸問題点を指摘する。

【例1 本文の分量と設問の関係】

平成十三年度版までの右文書院『古典』⁽¹⁸⁾は、単元題材名「世界の借屋大将」として『日本永代蔵』巻二の一文を収録し、教材化していた。しかし、平成十九年度版の右文書院『古典』⁽¹⁹⁾、『新古典』⁽²⁰⁾、『新編古典講読』物語・小説評論 漢詩・思想 史伝（以下、『新編古典講読』と略す）⁽²¹⁾はともに、教材収録本文を一話の前半の

「この家に奉公するほとにもなき者ぞ、ぬくもりのさめぬを受け取りしことよ。」と、また目をかけしに、思ひの外に減のたつこと、手代我を折つて、食ひもせぬ餅に口をあきける。

の部分までに留めている。

この教材において、平成十三年度版の『古典』の「学習の手引き」の設問は「『世界の借屋大将』という題名」を説明せよ、「各段落の要旨を箇条書きにまとめたうえで、全体の構成の特色を考えよ」であった。それに対し、『新古典』『古典』『新編古典講読』の「学習」にも、先の設問がそのまま残されている。すなわち、巻一の二の前半だけの本文から「本話の題名の意味」を考えることになるのである。

後者の三教科書ではさらに、とは異なる設問が続く。『新古典』の「学習」では「藤市の才覚や儉約ぶりを表している部分を抜き出し印象に残る点を話し合おう」「本文の文体の特徴について気がついた点を挙げる」とい

う設問である。『古典』と『新編古典講読』には共通して、本文の読解をもとに「初めて家持ちとなり、これを悔やみぬ」および「旦那は聞かぬ顔してそるばん置きし」の箇所の「理由を問う」問題が設定されている。

元々「世界の借屋大将」の原文には、教科書のように目に見えて「区切られた」形式段落は設けられてはいない。また、読者が感じる「題名の意味」やその重さは、本話の前半の展開だけで考えるか、後半を含めた一話全体で考えるかによって、異なってくると思われる。前半部分だけであれば「向後家あるからは、京の歴々の内蔵の塵ぞかし」という藤屋の位置づけと、藤市の日頃の商売の様子と餅のエピソードの印象により、儉約の教訓の話は終わる。しかしかつての『古典』の教材のように巻二の一の一話全体を読む読者は、前半の「人の気づかぬ」智恵を知った上で、さらに後半のエピソードを連鎖させて読み進んでいく。

何より、わが子を見るほど、おもしろきはなし。(中略)この心からは、いろは歌を作りて読ませ、女寺へも遣らずして、筆の道を教え、ゑひもせず京のかしこ娘となしぬ。

さて、宵から今まで、おのおの話したまへば、もはや夜食の出つべきところなり。出さぬが長者になる心なり。

一話全体で読む場合、前半部分における商売上の注意深い智恵に加え、「どのような分限でも人の親である以上、可愛い娘への愛情に目がくらんで、つい無駄遣いをしてしまつたらう」という常識的な予想とは異なつた藤市の実利的な教育観、人間の小腹の空き時という生理的「食」の欲求と期待をも裏切る藤市の教訓、…このような後半の話と結末が連鎖的に畳みかけられる、その「はなし」の口吻によってこそ、「世界の」と冠される人物像のイメージは醸成されているのである。後半部の段落の存在によって、娘への態度や若者たちへの教訓にみる「教育者藤市像」「次世代へと連続する時間も視野に入れた藤市の姿」といった「読み」の意味も付与される可能性がある。教科書改訂後の単元に残つた「同じ設問が問われていても、改訂前の教材本文の分量が変わり後半部を教材に欠く以上、生徒に求める答えの達成点を、改訂後では一話の前半部分からの考察に限られるものとして、指導者は配慮せねばなるまい。

指導時間の構成や時間配分の都合を考えてであろうが、やや長い一話を区切って部分的に教材化する分量的な配慮は、各社教科書によりそれぞれ行われ、工夫されているようである。⁽²³⁾この右文書院の例でも、本文テキストの分量が一話の約半分となった点、「新古典」の設問の中に「才覚や儉約ぶり」といった解答への誘導的な語句（ヒント）が混じっている点などに、改訂以前の「古典」よりも難度を下げわかりやすくしようとする意図が窺える。だが、設問に依然残された「本話の題名の意味」の理解の到達点、指導目標を具体的にどこまでとするのか、という問題は残る。それらは一話前半の文章の記述から読者が理解できる「読み」として、指導者の側に認識されていなければならない。

【例2 小見出しと図解の利用】

先の例とは逆に、教育出版『古典 古文編』⁽²⁴⁾は「世界の借屋大将」一話全文を収めながら、本文を内容段落ごとに改行するだけでなく、原文にはない「小見出し」を追加して章段を分け、江戸時代の商家の生活に関連した事物のカラー図版や写真を多数収載している。先に述べた「一話全体の構成内容」の理解、の点に留意した編集である。小見出しは「一 借家住まいの分限者」「二 藤市の工夫と始末」「三 藤市のやりくり」「四 娘のしつけ」「五 長者の指南」の五つである。

生徒が要旨を作るような学習活動の場合、例えば右文書院『古典』の「各段落の要旨」のような設問を指導する場合、改行箇所等をヒントにするとしても、本来は小見出しのない文章から文脈を追って辿る方が読解力を鍛えることになる。小見出しを読み込みのヒントにする方が、より易しい指導目標に向けて設定された教科書とみられる。この教材を用いるならば、小見出し利用による各章段の読みの方向づけを前提として、「学習の手引き」の設問「藤市はどのような工夫をして儉約していたか」を本文にそってさらに具体的に検証する、など、ふさわしい指導目的への切り換えが必要である。

教科書本文の「わかりやすさ」への傾倒をよしとするかどうかは、教科書を使用する学校ごとの実際の授業計画

や指導目標、授業の展開の如何にもよるだろう。ただし、教科書が図解を伴い視覚的に本文内容をイメージしやすいものとなっているとはいえず、その指導そのものは省力化できない。「大福帳」など江戸時代当時の商家の道具や風俗などは、図版や写真を見るだけで生徒が即「理解できる」ものではなく、その使用者・使用目的・使用方法や関連する生活認識等についての説明を要する。指導する側が理解しているだけでなく、生徒にとってわかりやすく配慮された適切な解説と、その時間配分に留意しなければならない。この問題は、次の【例3】の場合でも同様に注意するべきである。

【例3 設問の方向性と教材観・指導観】

東京書籍では二種の教科書で「世界の借屋大将」を、他一種で「大晦日はあはぬ算用」を採用しているが、それぞれの単元設定と扱い方に大きな違いがみられるため、合わせて比較し検討したい。

まずA『新編古典』²⁵⁾では、単元名「7 小説を楽しむ」として『西鶴諸国ばなし』巻一の三「大晦日はあはぬ算用」を採用し、「『西鶴諸国ばなし』を読み、近世の人々の生き方や考え方について理解を深める。」「近世独特の表現を知る。」というリード文を掲げている。これに対して、B『精選古典』²⁶⁾及びC『古典 古文編』²⁷⁾では「日本永代蔵」巻二の一「世界の借屋大将」が単元名「近世文学に見るくらし」として採用され、「『日本永代蔵』を興味や関心を持った事柄について調べて文章にまとめる。」というテーマが掲げられている。

Aでは巻末に次の「学習」の設問がある。

- ① この話の主人公の性格や暮らしぶりは、どのように描かれているか。
- ② 金子一両がなくなつた時、客はそれぞれどのような対応をしたか。
- ③ 次の表現のおもしろさはどのような点にあるのか、説明してみよう。
 - 1 直なる今の世を横に渡る男あり。 七四・4
 - 2 貧病の妙薬、金用丸、よろづによし。 七四・9

4 話の末尾に「かれこれ武士のつきあひ、格別ぞかし。」七八・13 とあるが、作者は、武士のつきあひのどのような点に感心しているのか、話し合ってみよう。

Aはこの設問に続いて「国語の変遷」と題するコラムがあり、江戸時代語を「古代語から近代語へと転換していく」「国語史的観点から捉え」「庶民の日常の話し言葉」などを解説している。

一方、B・Cの教科書では両者とも、本文を「読む」ための「学習のしるべ」「学習の要点」に続き、次のような「学習のまとめ」と「古文学習のしおり」が掲げられている。

学習のしるべ □ 藤市の儉約ぶりや才覚に注目しながら本文を読んでみよう。

学習の要点 □ 藤市の儉約ぶりを示す言行を箇条書きにしてみよ。

2 藤市の娘は、近所の男子とどう違つのか、説明してみよ。

学習のまとめ □ 藤市の生き方についてどう思うか、各自の考えを発表しよう。

古文学習のしおり「調べたことを文章にまとめて発表する」

一 興味・感心を持った事柄を発表する

二 課題について調べる

三 調べた事柄をまとめ、文章化する

四 まとめて文章を推敲し発表する

「発表参考資料・例」 「近世の貨幣」(図)

「学習課題」本文に示した手順を参考にして、例えば、次のような事項について調べ、それを文章にまとめてみよう。

- 1 江戸時代における塩や酒、綿の生産について
- 2 江戸時代における年末年始のしきたりについて
- 3 江戸時代の食制度について
- 4 江戸時代の服装・髪型について

B・Cの「古文学習のしおり」では、発表参考資料なども掲げられ、江戸時代の生活文化に関わる課題提起
図書館調査 文章化 推敲 発表という指導の流れの点で、Aの古文解釈的な学習よりもずっと総合学習的な授業
展開が想定されているとみられる。Aの教科書を用いる場合は、近代日本語の変遷についての国語史的解説、かつ
「主人公の性格や暮らしぶり」「表現のおもしろさ」「作者は武士のつきあいのどのような点に感心しているのか
(傍点は引用者に拠る)」など、ストーリーに沿った小説的な解釈の読み の方法を構築する授業展開が予想さ
れる。だがB・Cの「古文学習のしおり」に沿うと、本文の前文(生徒が) 作品を読み終えた後、各自が興味や
関心を持った事柄について調べて文章にまとめることを課題にしてある」に謳われるとおり、「藤市の儉約ぶりを
示す言行を箇条書き」し「藤市の娘と近所の男子との違い」から「生徒が」藤市をどう思つか」を引き出すのが
学習のポイントであるようだ。この場合テキストは調査の「題材」的契機となり、生徒の興味の対象が江戸時代当
時の歴史であれ文化であれ、実質は現代語による調査と作文、意見発表能力の練習に比重を置く国語表現的な授業
の展開が予想される。Aの指導の流れとB・Cの指導の流れとは、「古文学習」の指導目標及び教員が行う指導
内容そのものが異なっているとみられる。

なお、B『精選古典』とC『古典 古文編』は共に、他の単元「五 近世小説」に「雨月物語」(浅茅が宿)、
「七 戯曲」に「冥途の飛脚」(新口村)を設け、同じ近世の作品としては『雨月物語』に「人間の真情のありよう
について考える」、『冥途の飛脚』に「浄瑠璃を読み、登場人物の生き方、考え方を読み取る」「詞章の表現上の特
徴を知る」といったねらいを与えている。秋成と近松の作品では登場人物の心理にそった、従来の文学的な古典の
読み 的学習指導、西鶴作品では歴史的な社会文化状況の調査、と、教材それぞれでアプローチを変化させてお
り、一つの教科書の中の近世の作品間でバランスをとっているともみられる。教員の滔々たる解説の披瀝より、学
習レポート作成や発表技術の練習など実学的スキルで学生の興味を繋ごうという風潮においては、B・Cの例のよ
うな「生徒の自主性に任せた発展学習」が好まれるのかもしれない。

しかし授業が単なる歴史文化調査の時間でよいならば、テキストは江戸時代の歴史を記録した文書であればよく、

絶対に教材が西鶴作品である必要はない、ともいえる。また、そうした時間は「国語」の時間であるとしても「古典」の時間だろうか。「古典」学習の時間は、教員が教材の「古典文体」を 読む 方法を生徒に「示して見せ」、生徒が自力で「読めるようになる」レベルに向かうための方法練習の時間であり、テキストはそのためにあるのではないか。内容の調査や報告は、まず基本的に文章を「読めた」後でなければ不可能である。

元より西鶴浮世草子の場合、登場人物の設定や事件が「換喩」や「提喩」で描かれることが多く、その一見象的な表現のリアリテイが読者を誘引してしまい、描かれた事件が歴史的「事実」であるかのように読者が錯覚する傾向があるが、書かれていることは決して歴史そのものではない。あるいは日本近代以降の作家が捉えた自然主義的・写実主義的な西鶴作品観が、教科書の編集者側に依然として影響しているのだろうか。今日、西鶴作品研究の立場からみても「西鶴の作品にそう書いてある、だから江戸時代当時の人々はみな、歴史的にそうであった」と考える考え方は 読み として浅薄であるといわざるをえない。大学での作品読解演習の場においても学生が最も早く脱却すべき誤謬は、文学と歴史との混同であり、「興味・関心を持った」歴史的事項と語句を調べただけで文章と文脈が解読できると思いつくことである。高校の古典学習においても、「書かれたもの」を正しく 読む ことから、学習者がその峻別の意識の入口を学ぶことが望ましい。

Aの教科書の「大晦日はあはぬ算用」は、「表現」の特徴に留意し、人物「内助」の「性格」を 読む 授業を単元として展開するものであった。ならばB・Cの「藤市」の話の場合も、この文章の表現の特徴に注意して 読 む べきであり、古典テキストからリテラシーを学ぶ授業展開が求められるのではないか。「藤市」の話は、人物の思惑や「性格」も、また筆者がそれを描く「態度」も、双方から 読む ことのできる教材だと思われる。読みとは、「藤市」一人の個人の心理だけを分析することではない。彼の思惑がその家族や周囲の人々に及ぼす微妙な空気を、その智慧を披露された時のその場の、その相手に予想される表情なども含め、見透されて描かれるテキスト「はなし」を読むことだからである。「儉約」か「吝嗇」か、どちらかで か×か、などといった一面的なレットテルを貼るだけでは、「藤市」の人物像とその事件を把握したことにはならない。歴史的事項の調査はその背

景の理解に必要な前提であり、歴史的事項を知識として知るだけではなく、まさにその「はなし」の「空気」(＝関係性の状況)を、「書かれていること」(＝文章)から辿って、読む、行為の学び、それが国語(古典)の時間には最も重要なものではなかるうか。

三 古典作品学習の意義と指導方法上の課題

「世界の借屋大将」が古典教科書に多く採用されるのはなぜか。節欲の「生活の智慧」の要素は現代人にとっても実用的に響き、藤市の意外な答えに一般人たちが驚愕する反応など滑稽な軽い笑いも含まれている。他の浮世草子作品の事件譚ほど極端な色欲や殺人等が露骨に展開せず、高校生向けの話として比較的穏当な内容とみられているのかもしれない。藤市の儉約の工夫に着眼でき、当時の歴史的な社会と文化への興味からの発展学習も可能、ということもあるう。

本話の国語教材化の歴史は古い。有働裕は戦前教科書の「西鶴作品の採用の理由」として、旧制中学に認められた教科書のある程度の学術性、大正時代の文学教育重視の名残、武田麟太郎など当時の近代文壇での西鶴熱の高さ、といった要素を、教材化の背景と考える。²⁸⁾『中学国文教科書』(明39)所収の本話「世界の借屋大将」について、その指導書『中学国文教科書教授備考』(大13)も、「この一文の熟読によつて、その「敏慧尖锐なる諧謔譏刺」とその「軽妙簡潔なる俳諧的修辞」とを特色とする西鶴の作風的一端を味はしめたいものである」などとしていた。授業の実情は、当時「ほとんどまだ訓詁注釈一点ばり」²⁹⁾であったとみられている。だが、古文の時間がただ「教材本文を機械的に現代語に置換する」だけの時間であったとは思われない。

当時から現代まで、西鶴を、読む、方法、教材としての扱い方などには、様々な工夫がなされている。その作品解釈の難しさの主たる原因は、総合学習的教材の扱いの問題が示唆することく、文学的文章の「行間」の微妙な意味と、作品の歴史社会的な「近世」の背景の説明の煩瑣さにあるようにも見える。が、それこそが作品の面白さのポイントである。

前者の「行間」の意味の点においては、「世界の借屋大将」の「藤市」や「大晦日はあはぬ算用」の「内助」に対して「作者は肯定的か否定的か、か×か」などというディベートで二者択一を決するような短絡的な発想の指導案では、古典文学作品の「読み」を深く追い求める試みは破壊されてしまったらう。古典教材を用いた生徒の思考訓練を阻害してはならず、二者択一ではない設問や問いかけが求められると思われる。作者の描き方や捉え方の端々には、いかにももつともらしい教訓の一方で、どこか対象に対する冷徹なまなざしや、常識を逸脱した人間への驚嘆、可笑しさなども漂うことから、読者からは幾つもの「読み」が出てきてもよい。多くの教科書の指導内容が「藤市の智慧」を理想的町人像と解釈するが、「はなし」としての観点からの解釈は広がりをもっている。「作者が「藤市の宣伝広告の才能も藤市の一長所として認めていた」ゆえに「借屋大将」の名が流れて「是を悔みぬ」なのである」と肯定する前田金五郎氏の一方で、前掲堀切氏は藤市像の「虚構化」や「戯画化」を指摘する。その他、戯画的ながらも町人倫理一般とは異なる「長崎商いの不確実性を認識した」「自主的」儉約者としての像、あるいは「おもしろさ」に包まれた「笑われる対象」、さらに「至極大真面目なのであるが、それこそが滑稽」「諧謔的に描き出した」とするなど、研究者の解釈は様々である。藤市の智慧話が「はなし」の視点において多様な解釈の含みをもつことは、諸説に指摘されている。「古典」の時間に扱った作品が史料と違い「虚構」であることの意味は、ここにある。テキストにおける解釈の含みや微妙な余韻こそが、読後感の興味であり、字句の表層の現代語訳だけでは到達できない、浮世草子の面白みであろう。正解の揺れを許さぬ試験問題の素材とすることは難しい作品かもしれないが、それを味わう場・時間の経験（＝授業）そのものは、非常に重要である。ある程度正しく文脈を理解できれば、読者である現代の高校生の方はむしろ、尤もらしい教訓とユーモアとの間隙に発生する微妙な意味を嗅ぎ分ける生理的感覚をもっているのではないか。作品の味を「生かして」「行間」の意味という表現を学習するためには、文学が本質的に持つある種の批判性や諧謔の感覚も、教員と生徒とが読者として享受し共有するべきだ。それは「古語の項目」を機械的に連ねた、出来合いの表面的な現代語訳の断片的情報の伝達作業で古文の時間を終わらせないための、可能性を開くことにもなるらう。

もう一つの問題は、内容の解釈の前に立ち足はだかる「近世」の背景の説明の工夫の難しさである。例えば、割合に小説らしい読みを展開できる教材とされている「大晦日はあはぬ算用」の場合であっても、事件や人物の關係性の理解の前提として看過できない「浪人」などの語句が、冒頭から出現してくる。

米屋の若い者をにらみつけて、直なる今の世を横に渡る男あり。名は原田内助と申して、隠れもなき浪人。広き江戸にさへ住みかね、この四、五年、品川の藤茶屋の辺りに店借りて、朝の薪に事を欠き、夕の油火をも見ず。(東京書籍『新編 古典 より』)

この「浪人」について見ても、各社教科書の脚注例は「浪人 仕えるべき主人のない武士³⁵⁾」などとある程度で、決して多くはない。高校生用の古語辞書の項目では「江戸初期からは」主家を去って禄を失った武士(例、『旺文社古語辞典 改訂新版、昭63・10』)などと説明されている。授業の予習で脚注を見、辞書項目をノートに孫引きで記してきた生徒が、その辞書的説明だけで本文の意味を真に了解できるだろうか。或いは太宰治『新釈諸国噺』「貧の意地」をサブテキストに援用するとしても、「直なる今の世を横に渡る」内助の「隠れもなき」無法さを単に「個人の性癖」とみるだけでは、事件で展開する人物達の相互の迷惑や行動の意味は解釈できないとみられる。

近世前期の「浪人」層というコンテキストの理解なく本話を読むことは、王朝の世界や在原業平の存在を知らずに『伊勢物語』を読むに等しい。「主家を去る」「禄を失う」とは彼らとその家族の身にどのような失業と経済的逼迫が迫ることなのか、近世初期に彼ら浪人層がなぜ発生し、どのような社会的立場にあったのか。内助たちの行動や心理の背景としての幕藩体制の成立状況や諸藩の改易等の影響、中世から近世への武家社会の変質について、各社の『国語便覧』や『図録』の利用を含め、授業の限られた時間の中で必要な定義を端的に力パシし、(しかも、その説明と知識の伝達で終わるのではなく)授業のメインである文章の読解に向かわねばならない。

その点から見て、古文の授業においては、(教材作品の時代の古今に関わらず)歴史文化的事項や語彙の調査だけを生徒に安易に丸投げすることはできないといえる。「生徒が自主的に調べて発表するのに任せる」授業展開では、レポートなどで結果を物理的に大量に集めさせても、古語辞書の項目の断片しか答えられない生徒からは、

読みではなくそのばらばらの断片の写しの知識しか返ってこない。その語句の断片を繋ぎ文章の意味を求めていく訓練を、指導する教員も学習する生徒も互いに苦心し、柔軟な思考で盛んに試みる過程こそ、古典学習の要ではなからうか。それは中学高校の古典の時間に留まらず、大学の演習・研究での解読力や実社会での文章読解力を広く養う営為にもつながる。知識を得ることが最終目的ではなく、知識を有機的に本文解釈に結びつける発見、そのための自覚的な読みと考える力のトレーニングが、「古文」の授業の展開には求められる。

前掲堀切論文は『本朝二十不幸』の文学的なアプローチの可能性を「古典の初歩導入教材として」提唱していたが、中学高校の国語の授業の中で、受験技術に留まらぬ古典の文学的な読み、基礎的態度が、どこまで自覚的に展開されているのか。その展開の前提があつてこそ、西鶴作品の「初歩導入」も可能である、と思われる。以上、西鶴作品の教材化の諸相の検討によって、作品の教材化が困難か否か、設問作りの向き不向き、などといった便宜性の以前に、古典作品に対する教材観の持ち方、教材本文の解釈の目標の置き方、授業の展開方法、古典学習を学ぶことの意義そのもの、などの問題が浮かび上がってくる。新指導要領の影響を考慮しつつ、今後も教材の作品例を検討し、作品の読みによって得られる有効なトレーニングや具体的な留意点について考察を行いたい。

本稿は平成十九年度福岡女子大学研究奨励交付金研究「教職をめざす学生支援のための教材研究プロジェクト」の成果報告資料（未刊行）をもとに執筆したものである。

注

- (1) 堀切実「西鶴と古典教育」、『西鶴と浮世草子研究』第1号P166～178、笠間書院、平18・6
- (2) 中河督裕・吉村裕美編『高等学校の国語教科書は何を扱っているのか。——国語教科書教材一覧・平成十二年度用——』（京都書房国語資料シリーズ、平12・1）
- (3) (1) 堀切論文P167の指摘

- (4) 古典 改訂版「教科書記号143筑摩 古 583、以下同」(筑摩書房、平11・3改訂、秋山虔他)
- (5) 『精選新国語 古典編』[117明治 国 601](平10・2検定。明治書院、平11・1初版、市古夏生他)
- (6) 『高等学校 古典(古典編)』[212桐原 古典024](平15・3検定済。桐原書店、平19・2、長島弘明他)
- (7) 『国語』[15三省堂 国 534](平6・1検定。三省堂、平7・3初版、広未保他)
- (8) 『高等学校 古典』[古文編] [15三省堂 古典005](平15・3検定済。三省堂、平16・3初版、平19・3四版、風間誠史他)
- (9) 『古典』[143筑摩 古典019](平15・3検定済。筑摩書房、平19・1、鈴木健一他)
- (10) 『高等学校 古典 古文編』[183第一 古典021](平15・3検定済。第一学習社、平19・2、妹尾好信他)
- (11) 『古典1』[50大修館 古典011](平15・3検定済。大修館書店、平19・4、中嶋隆他)
- (12) 『精選古典』[50大修館 古典013](平15・3検定済。大修館書店、平19・4)
- (13) 『古典 改訂版』[143筑摩 古 564](平10・3検定済。筑摩書房、平11・4、秋山虔他)
- (14) 『新版 古典1』[175尚学 古 585](平11・3検定済。尚学図書、平14・1初版、大岡信他)
- (15) 『古典(総目)』[172旺文 古総005][昭60・3検定済。旺文社、平5・1、井上宗雄他)
- (16) 『高等学校 国語 改訂版』[50大修館 国 597](平10・2検定済。大修館書店、平11・4初版、平13・4第三版、中嶋隆他)
- (17) 『明治書院 精選古典』[117明治 古典015](平15・3検定済。明治書院、平16・1初版、平19・1四版、市古夏生他)
- (18) 『古典』[142右文 古 533](平7・2検定済。右文書院、平13・4、加藤是子他)
- (19) 『古典』[142右文 古典017](平15・3検定済。右文書院、平19・4、天野成之他)
- (20) 『新古典』[142右文 古典018](平15・3検定済。右文書院、平19・3)
- (21) 『新編古典講読 物語・小説 評論 漢詩・思想 史伝』[142右文 講読016](平18・2検定済。右文書院、平19・4)
- (22) 『森耕1』『西鶴論——性愛と金のダイナミズム——』(おつふう、平16・9)『第二部第三章』『日本永代蔵 論——世界は広し——』
この他、『日本永代蔵』巻二の一を部分的に教材化したとみられる例はこの藤市、利発にして……—旺文社『高等学校 国語
改訂版』、『折節は正月七日の夜……—角川書店『高等学校 古典』、『日栄社『高等学校 古典』などがある(共に平成
十一年度用教科書の例、前掲中河・吉村編書より)。
- (23) 『新編古典講読 物語・小説 評論 漢詩・思想 史伝』[142右文 講読016](平18・2検定済。右文書院、平19・4)
- (24) 『古典 古文編』[17教出 古典007](平15・3検定済。教育出版、平19・1、影山輝國他)
- (25) 『新編古典』[2東書 古典001](平15・3検定済。東京書籍、平19・2、徳田和夫他)
- (26) 『精選古典』[2東書 古典002](平15・3検定済。東京書籍、平19・2)

- (27) 『古典 古文編』(2東書 古典003)(平15・3 検定済。平19・2)
- (28) 有働裕 『教科書としての西鶴作品』(『愛知教育大学教科教育センター研究報告』第15号、平3・3)
- (29) 有働裕 『中學國文教科書 における西鶴作品について』、前同、第14号、平2・3)
- (30) 前田金五郎 『西鶴研究書読後感一括』(『近世文学雑誌』、勉誠出版、平19・11)
- (31) 堀切実 『世界の借屋大将』の状況設定——京の町触にみる共同体意識の視点から——(『読みかえられる西鶴』ペリかん社、平13・3)
- (32) 倉員正江 『世界の借屋大将』にみる戯画化の手法(前田雅之他編『新しい作品論 へ、新しい教材論 へ 文学研究と国語教育研究の交差 古典編(4)』、右文書院、平15・1)
- (33) 佐野正俊 『井原西鶴』日本永代蔵 卷二の一 『世界の借屋大将』の教材性、(32) 同書所収
- (34) 矢野公和 『虚構としての』日本永代蔵(笠間書院、平14・10)、第四部『一』日本永代蔵の諧謔
- (35) (11)、(12) に同じ。